

[文献]

- 1) De Broe S, Christopher F, Waugh N. The role of specialist nurses in multiple sclerosis: a rapid and systematic review. Health Technol Assess 2001; 5: 1-47.
- 2) Mayer C, Moran E, Luoto E et al. The role of the MS specialist nurse. Int MSJ 1998; 5: 25-9.
- 3) 大橋高志, 太田宏平, 清水優子ほか. 多発性硬化症におけるインターフェロンβ-1b療法の外来導入の実際. 東女医大誌 2006; 76: 205-11.

今月の



隣に伝えたい 新たな言葉と概念

【ウートフ現象】

英 Uthoff's phenomenon, Uthoff's sign 和 ウートフ現象, ウートフ徴候
同 温浴効果, hot bath effects

〈解説〉 多発性硬化症の患者では、体温の上昇によって一時的に症状が増悪することがあり、ウートフ現象と呼ばれている。1980年にドイツの神経眼科医ウィルヘルム・ウートフが、運動によって一時的に視力が低下するのを報告したのが最初で、入浴後に同様の現象がみられることから「温浴効果」とも呼ばれている。視力低下以外にも、四肢の脱力やしびれ、痛み、倦怠感など、さまざまな症状がみられるが、多くは今までに経験したことのある症状であり、体温が元に戻ると数分から数時間でおさまってしまう。

体温の上昇によって脱髄を起こした神経の伝導速度がさらに遅くなるためだと考えられており、高温、温かい飲食物、発熱などが原因となることもある。発現頻度や状況、程度には個人差が大きいが、一般的には、①熱い風呂を避けること、②運動は軽めにする、③夏期は冷却グッズや冷たい飲み物を携帯すること、④冬期は暖房の温度を低めに設定して電気毛布やアンカを使用しないこと、⑤鍋物などの温かい飲食物を避けること、⑥感染症を予防することなどに留意する。

治療にはカリウムチャンネル阻害作用のある4アミノピリジンを使用することがあるが、日本では製剤化されておらず、一般的には使用できない。

〈関連分野〉 神経内科, 神経免疫学

(大橋高志)